Log-in ?War?ld

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｇ－ｉｎ　？Ｗａｒ？ｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ９２０１Ｗ

【作者名】
神崎はやて

【あらすじ】
通信機器ネットワークが発達する現代。
急速に進歩を遂げる世界は、たった１人の天才によって、前人未到の世界を生み出した。
それが、マスカレイド。
マスクを与えられた人間たちが、己の命と欲望を賭けて戦うゲーム。

主人公の風上　迅は、ある日趣味のネットサーフィンに没頭していると、得体の知れないサイトへアクセスしてしまう。

それこそが、自らの?非日常?を開く扉であるとも気づかずに――――。

Prologue 【Shall we dance?】

適材適所という言葉がある。

どんなものにもそれに適した場所というものがあり、そこが一番、力を発揮することが出来るのだという言葉だ。

どんなものにも、それにお誂向きの場所がある。だから、自分がここで力を発揮できないのは、ここが、自分が力を発揮するに値する場所ではないからだと――――――そんな、言い訳がましい台詞を吐くつもりはない。

だが結局は、その理屈に甘んじてしまう自分を否定できない。人間というのは時に、今の位置に安住して、新天地へ旅立つことを恐れるものだ。

今、自室でパソコンのマウス片手に画面へ向き合っている少年もまた、そんな思考の持ち主であった。

風上　迅。それが、彼の名である。

市内の高校に通う、ごくごく普通の高校2年生。
家庭にも恵まれ、会社員の父親と、専業主婦の母を両親に持つ。
2つ下の妹は、兄の出来の悪さに溜め息をつきながらも、面倒見よく相手をしてくれる出来た娘だった。

一方少年自身は、特に可も無く不可も無くというレベルの日常を謳歌していた。

運動神経は十分過ぎるくらいにいいし、学業における成績も悪くない。

が、にも関わらず部活動は無所属――――――つまりは帰宅部で、代わり映えのしない学校生活を終えた後は、家へ帰って趣味のネットサーフィンに精を出す。

今日もまた学校から帰宅するなりネットを開き、夕食後も宿題と予習復習を済ませた後、意気揚々とパソコンを開いて、次々とインターネットを渡り歩いていく。

と、そんな中だった。

まさに、晴天の霹靂としか言いようがない。

いつもどおりサイトを渡り歩く最中（さなか）、ワインレッドの色をした、いかにも怪しげなサイトに偶然接続してしまったのだ。

その、トップに書かれているのは――――――。

「マスカ……レイド？　何だ、このサイト……？」

怪しいと思いながら、シンプルな字体で大きく？マスカレイド？と描かれた下にある、？Ｍａｓｋ　ｉｎ？という文字を試しにクリックしてみる。

すると。

「なっ、おいおいおい！？」

突如、パソコンが勝手に何かをダウンロードし始めた。

しまった、ウイルスの類か！

そう思ったが既に時遅し、一旦始まったダウンロードは何故かキャンセルすることが出来ず、いくら弄っても？ダウンロード中？と表示されたウインドウは消えてくれない。

そして、ついにダウンロード率が１００％となり、作業の完了を示す表示が映し出された。

「だ、大丈夫……なのか？」

何も起こらないことを理解すると、おそるおそる、ダウンロードされたばかりのファイルを開いて中身を確認する。

突如表示されたウインドウに一瞬意味も無く身構えるも、その内容を見、迅は思わず溜め息を漏らした。

「何だ、やっぱウイルスとかじゃなかったか……。……けど、これって一体、何のファイルだ……？」

見たところ、ウインドウにクリック出来る場所は何もなく、ただ一言、こう書かれていた。

『……Shall we dance?』

第1話　【仮面舞踏会】

何度でも言うが、風上　迅はごくごく普通の高校生だ。

それ以上でもなければ、それ以下でもない。

誰に似たのか、鋭い目付きにより時に不良と間違われたりもするのが、ちょっとした悩みだったりする。迷子を送り届けようとして、誘拐と間違われて御用になりかけたことさえあった。

が、彼自身そんな世界とは一切無縁。それどころか髪も染めていないし、ピアスだって開けちゃいない。未成年でのタバコや酒などもっての外だ。

見た目に反し、社会という秩序に見事に取り込まれた彼の朝もまた、そんな普通の中にカテゴライズされるものだと言えるだろう。

「お早う……」

「あ、お兄ちゃん。おはよー！」

欠伸をしながら降りてきた兄とは対照的に、元気溌溂と返事を返してきたのは、彼の妹、風上　凛。

迅の２つ年下で、市内の中学校に通う中学3年生。

兄と違って十分過ぎるほど優秀な才能をもって生まれた彼女も今や、立派な受験生。

陸上部に所属していて、部活も夏までは続くので、塾との兼ね合いから迅とは最近帰宅時間がずれ込むことが多かった。

「あ、ごめんね。今退くから、もうちょっと待ってて」

「へいへい。あんまり待たせるなよー」

「はーい！」

陸上部の練習がある凛は、基本的には迅より圧倒的に早く家を出る。通常は、迅が起きた時には既に凛は家にはおらず、母の咲夜が作った朝食がテーブルに並んでいて、それを彼女と雑談などしながら食べて家を出るのが日課なのだが――――――それが今の時点でまだ家にいるということは、おそらく寝過ごしでもしたのだろう。

いかにも、しっかりしているように見えて、どこか抜けている気（け）のある彼女らしい。

慌てて身支度を整える凛の合間から手を伸ばし、とりあえず歯ブラシと歯磨き粉を確保すると、適当に水道を捻って歯ブラシを濡らしてからその場を離れる。

あれほど急いでいるのなら、おそらく周りは見えておるまい。

慌てている無意識の中で肘やら拳やらが飛んでこない内に、退散した方が身のためだ。

長い付き合いでそれを十分に理解している迅は、歯ブラシに歯磨き粉を塗りつけながら、そそくさとその場を後にした。

続いて迅が向かったのは、リビング。

毎日咲夜が掃除しているらしいフローリングの床は清潔感に溢れており、中心に置かれたテーブルにはトーストとハムエッグの乗った皿が置かれていた。

「お早う、母さん」

「あら、迅。お早う」

すぐ傍の台所にいる彼女に挨拶をし、テーブルの椅子について歯を磨く。

「凛、また寝坊したみたいだな」

「そうなのよ……。今日は大事な朝練があるって言ってたのに、仕方ない子ね」

そんなことを言いながら、2人して苦笑する。

迅のところから、背を向けた母の表情を伺うことは出来なかったが、声の感覚でなんとなくそうだと理解することができた。

そんなことを話していると、漸く支度を終えたらしい当の本人が慌ただしく洗面所の方から駆けてくる。

「い、行ってきまーす！」

「転ぶなよー」

慌てている時の凛はよく転ぶ。

からかう意味と気遣いの意を半分ずつくらい込めて言ってやったが、本人はそれに気の利いた返事を返す余裕もないのか、蹴破らんばかりの勢いで玄関の戸を開け、出ていった。

「ふふ。朝から賑やかね」

お茶を入れたカップをテーブルへ置きながら言う咲夜に、迅は呆れたように両手の平を上げた。

☆★☆★☆★☆

「おはよー、迅君！」

「おっす」

それから数十分後。

いつものように「行ってきます」と叫んでから玄関の戸を閉めると、外には少女が1人、迅が家から出てくるのを待っていた。

ふわりとしたクリーム色の髪と丸い眼が、どこかほわほわとした空気を漂わせる彼女の名は、羽鳥　雛。
迅の隣の家に済む幼馴染で、幼稚園の頃からの付き合いだ。

「忘れ物はないか、雛？」

「うん！　迅君に言われたとおり、ちゃんと寝る前に確認してきたよ♪」

「よしよし、偉い偉い」

よしよし、と頭を撫でられると、「えへへ♪」と表情を綻ばせる雛に、何も言えず迅は苦笑する。

これだけ子供扱いすれば嫌がって当然なところを、彼女は当然の如く――――――むしろ、喜んでそれを受け入れるのだ。

要するに、天然なのである。

「さあ。さっさと行こうぜ」

「うん♪」

2人揃って、通学路を歩く。

大都会、というほどでもないがそれなりに整備された住宅街の街並みは、もう幼少の頃から見慣れた思い出深いものだ。

小学校、中学校、高校と、学び舎が変わるにつれ通学路も微妙に変わっていったが、最初に雛と並んで歩くこの道だけはずっと変わら

ぬままだった。

「そういえば迅君。さっき凛ちゃんが慌てて走ってくのが見えたんだけど、何かあったの？」

「寝坊して朝練に間に合わないとかで、慌てて出てったんだよ。全く、母さんじゃないが、しっかりしてるのかしてないのかわからないよな、あいつ」

「迅君がしっかりしてるからだよー」

「……誰かさんのおかげでな」

「えへへ、それほどでもー」

「褒めてねえよ、馬鹿」

実際のところ、迅が特別しっかりした人間であるわけではない。隣で勘違い甚だしくも照れている様子の幼馴染が起こす、数々のドジやうっかりのおかげで、相対的に彼の器用レベルが際立っているだけなのだ。

さり気なく嫌味の篭った台詞を返してやったつもりなのだが、この天然娘には全く効果がないようで、向日葵のような笑顔で楽しそうに隣を歩いている。

後は他愛もない雑談を交えながら学校まで歩いていき、玄関を抜けて揃って同じ教室へと歩いていく。

学校の名は、市立嶺原高校。

学力レベルもそこそこの――――――いわばここも、普通の類を出な

い場所であるから、迅も行くべきしてそうなったのかもしれない。

しかし、迅の記憶に残る限りでは成績優秀だったはずの雛が、迅と同じ平凡な高校への進学を希望したのは、迅にとっては若干の謎だった。

兎も角何の因果か、幼稚園から高校までずっと同じ施設、同じクラスという、ここまで来るとある種の運命すら覚えそうな事態になっている2人は、今日も仲良く揃って教室のドアを開けた。

すると。

「おーい、迅ー！」

迅の席は、窓際の前から4番目。

まだ主人を迎えていないはずのそこから声が聞こえてくるのも、迅にはもはやお馴染みのことだった。

おう、と返事をしてそこへ向かうと、2人の人影が手を上げて迎える。

「よっ、おはようさん」

「お早う、零次」

上げた手を叩いて挨拶を交わす2人は、高校に入って以来の親友だ。

相手の――――――跳ねまくった茶髪の下でへらへらと人懐こそうな笑みを浮かべた少年の名は、須田　零次。

高校に入ったばかりの頃のある日の昼休み、1人で弁当を食べていたのを迅の方から誘ったのが始まりだった。

その時、漫画の趣向など共通の趣味や話題で盛り上がったのを切欠として付き合いが始まり、現在ではすっかり気の知れた仲となった。

「あれ？　絢香、お前がここにいるなんて珍しいじゃん」

続いて目を向けたのは、零次と共に迅の席のところで待っていたもう1人の人物――――日野　絢香。

小ざっぱりとショートカットにされた黒髪が、快活で気さくな彼女の性格を忠実に表している。

彼女と雛はちょうど迅と零次のような親友の間柄であり、その関係で迅も彼女と知り合うこととなった。水泳部に所属していて、まだプールの開いていないこの季節は部活もそう活発には活動していない。

元々彼女は朝が弱いそうで、プールの開いている時期は何とか耐えていた早起きも、それがない冬から春にかけての間はまるで冬眠する熊の如く惰眠を貪るのだ。

故に大抵は授業ぎりぎりに来ることが多く――――この時期、授業開始までは若干早いこの時間帯に姿を見ることは、珍しいことだった。

「何さ迅。私がこの時間にいちゃいけないってのー？」

「いや、そうは言ってないけどさ。けど、やっぱり珍しいし」

「明日は槍が降らなければいいけどなー」

「くぅ……」

何か言ってやりたいと思うも、普段が普段だけに何も言い返すことが出来ずに、結局彼女の口から出てきたのは悔しそうな呻きのみ。

そう思うのならもっと早く起きればいいじゃないかとも思うが、同時にそれが不可能であることも十分に理解しているため、迅は苦笑いでその場を流した。

「そ、そうだ。迅、アンタ知ってる？　このクラスに明日転校生が来るんだって」

「転校生？　なんでこんな時期に……」

少々強引な方向転換だが、それにわざと気付かないふりをして、迅は疑問を口にする。

季節は春だが、時期は既に新年度が始まった5月。

4月にならともかく、転校してくるにしては少し時期がずれているようにも思う。

迅の問いに、さあね、と、絢香の方もどうやら要領を得ていないらしい様子で肩を竦めると、零次が身を乗り出して、唯一の情報源である彼女へ訊ねた。

「なあなあ！　その転校生って、男と女、どっち！？」

「うーん、どっちだって言ってたかなー。確か……女の子、だったかな」

その辺りは記憶が曖昧なのか、頭に手を当てつつなんとか思い出した彼女の情報に、ひゃっほう、と大袈裟に手を振り上げながら喜びを露にする零次。

まあ、確かに男子と聞くよりはテンションが上がるのは男子としての心理だろうが、ここまで大っぴらにそれを表に出すというのも珍しいものだ。

それもこれも、彼が端正な美形顔と名前に似合わずお調子者で、女好きだということに起因する。

これさえなければ完璧なのに――――と、何人かの女子が話しているのを聞いたことがあるだけに、友人としても何だか残念に思えてしまう迅であった。

「まだ、美人が来ると決まったわけでもないだろ。……それに、女子かどうかだってまだはっきりと解らないじゃないか」

席に座って頬杖をつきながら、隣の絢香と同様に呆れたような視線を送ってやると、零次は「ちっちっち」と舌を鳴らしながら指を振る。

これが妙に様になるのだから、本当に惜しい性格だと思う。

「解ってねぇな、迅は。いいか、想像してみろよ！　先生に付き添われて教室に入ってきて、自己紹介を終えた後に天使のような微笑みを浮かべる転校生の姿をっ！！！」

「……想像出来るか？」

「いんや、全然」

一応、絢香に確認をとってみると、想像通りの答が返ってくる。

よかった。どうやら、自分が異常というわけではないらしい。

いや、別に完全に想像出来ないわけじゃない。

迅にだって、それ相応の想像力というものが備わっているわけだから、その光景を想像することくらいは出来る。

だが如何せん、それが絵になるのは美人がやってきた場合に限定される。

故に、その像がまだ明らかになっていない状況で、想像も何もあったものではない。

それは、ネットサーフィンという趣味を持ちながら現実的距離感を忘れない迅ならではの発想なのかもしれなかったが、そんなことは知る由もなく、想像力――――――基（もとい）、妄想力に秀でた零次は、予想以上に薄い2人の反応に唇を尖らせた。

「なんだよー。妄想力が足りないぞ？」

「そんなもん、なくて結構だよ」

「右に同じ」

「うわ、釣れねえ奴ら」

そんなことを言いながら、迅は鞄を開けた。
1時限目の科目――――今日は確か、英語だった――――の教科書を出すためだ。
鞄の中には1時限目から順番に教科書やノートを入れてあるため、中身を見ずとも手を突っ込むだけで、必要なものを取り出すことが出来る。
この時も、迅は英語の教科書と横線の引かれた英語用ノート、筆箱だけを取り出すつもりで中身を掴み、引っ張り出した――――のだが。
「……ん？　迅、何か落としたぞ？」
「え？」
零次にそう指摘され、迅は取り出した物を見る。
英語の教科書と、ノートと、筆箱。必要だと思われる物は、全て机の上にあった。
もしかしたら、下にあった他の教科書が一緒に落ちてしまったのかもしれない。
そう考えた迅は、今時珍しい、琥珀色の光沢を放つ木造の床に目をやって――――。
「……は？」

――――絶句した。

ここに落ちているのは、本当に自分の持ち物なのだろうか？　そう、思わず疑問を投げかけたくなるほど予想を超えた品が、そこにはあった。

落ちていたのは、仮面。

全体的に燃えるような赤に彩られたそれは、どこかの仮装場で用いられそうなそれに似ている。

目の部分はビー玉のような半透明の意匠が施されていて、横幅が広く、付ければ口元だけが覗くような形になっていた。

「何だそりゃ？　お面？」

「じゃなくて……どっちかって言うと、仮面って言った方が近いんじゃない？　ていうか迅、アンタ演劇部にでも入ったの？」

「んなわけあるか」

いかにも安物なイメージを抱かせる評価を下した零次にツッコミながら、興味本位で訊ねてくる絢香の質問をぴしゃりと跳ね除けると――――ちょうどタイミングよくチャイムが鳴った。

後少しもすれば、若干嫌味な英語教師が入ってきて、今日の分の英語の朗読を始めるのだろう。

いつまでもそこにいるとその教師からの嫌味ラッシュに遭うことを理解しているからか、2人は若干喋り足りなそうにしながらも、すごすごと自分の席へ帰っていった。

「……ったく。俺が部活に入るわけないだろ」

帰宅部の方が気楽でいい、を地でいく迅は、これまで一度も部活動というものに入ったことはない。

それは別に矜持とか大層なものではなく、ただの堕落と切り捨てられれば返す言葉もない。

だが、少なくとも当分の間は、考えを改めるつもりは彼にはなかった。

（それにしても……）

英語教師が戸を開けて教室に入ってくるのに応じ、教科書を開きながら、迅は乱雑に鞄へ突っ込んだ仮面をちらりと見た。

このような代物、自分で買った覚えもなければ家に置いてあった記憶もない。ましてや、それを自分の鞄の中へ入れるなどと、考えられもしなかった。

（一体、何なんだ……！？）

若干ホラーじみた思考に陥った迅は軽く身震いすると、気を取り直して、英語教師によって、上手いのか下手なのか解らない字ですらすらと黒板へ書かれていく英文を目で追った。

☆★☆★☆★☆

「ただいまー」

「お帰りー」

たったの、たったの1往復。

そんな軽い、いつもどおりの挨拶を交わしながら、迅は家の玄関を抜けた。

あの後、妙に仮面の存在が気になってしまった迅は、まるで窓から教室に入ってきてしまった蜂の動向を気にかけるかのように落ち着かず、気づけば意識が仮面へ向いているような状況だった。

入れた覚えも――――――ましてや、所持した覚えすらない代物がいつの間にか鞄に入っていた。気にしない方が無理というものだろう。

妹の悪戯ということも考えたが――――――おそらくそれはない。ただでさえ不景気な世の中、そんなところに貴重なお小遣いを割くような真似はしないだろう。数日前、たまに早く返ってきた父に、欲しい服があるからと言って小遣いを強請っていたのを覚えている。ということで、その考えは却下だ。

しかしそうともなれば、思い当たる節がなくなるのもまた事実で――――故に、曇りは晴れることはなかった。

そんなことをずっと考えながらいた所為か、特に部活をしていたわけでもないのにどうも草臥れた身体を引きずりながら、台所仕事をしている母親を横目に、迅は2階にある自室を目指す。

「あー、かったるいなぁ……」

早々にベッドに鞄を放り出し、中を漁って携帯を取り出して――――。

「……あー」

思い出したように、?それ?を手に取った。

「俺、こんな仮面買った覚えないんだがなぁ……」

しげしげと見つめるのは、真っ赤に塗られ、横に長く流れるように広がった、シャープな仮面。

学校ではあれほど気になって仕方がなかったものだが――――何故だろう、家へ帰ってどっと疲れが出てくると、不思議とどうでもよくなってきてしまった。

「……ま、いっか」

そう思ったが最後、迅はどこまでも気楽だった。

いくら頭をひねったところで、この仮面がここにある事実は変えら

れないのだし、それは仕方のないことだと自分を納得させて、いつものとおりパソコンの電源を入れる。

ＯＳの立ち上げ画面が表示され、デスクトップへのロードが始まった。

それを眺めながらベッドに腰掛け、何気なく仮面を弄ぶ。

未だに出自が謎であるこれも、その内この部屋のアンティークの１つに生まれ変わるのだろうな、などとどうでもいいことを考えながら、頭を空っぽにして、ビー玉のような仮面の瞳に魅入っていた。

「さて。そろそろいいかな」

そんな時間が少しの間流れた後、迅はようやっとベッドから腰を上げた。

購入して早数年。

もはや生活の一部、立派な相棒になりつつある彼のパソコンは、デスクトップを表示したまま、主に使われるのを今か今かと待っている。

青い水しぶきを写した壁紙が、デスクトップを美しく彩っていた――――が。

「これって……！」

その上に、立ち上げた覚えのないウインドウが開いている。

ワインレッドの、見ようによってはどこか不気味なそれには、見覚

えがあった。

「これ……昨日の……！」

昨夜、このパソコンに突如として強制的にダウンロードされたファイルを開けて、出てきたものと全く同じものであった。

Ｍａｓｑｕｅｒａｄｅ（マスカレイド）。

特にこれといった特徴もない、有り触れた字体のアルファベットで大きく書かれたそれは、デスクトップ上で昨夜より一層の存在感を持って見えた。

「おい、今パソコンつけたばかりだぞ？　どうして、これが……！？」

今、迅はパソコンの電源をつけて以来、一切パソコンに触れてはいない。

故に、もしこの画面を表示させようとしたとしても、絶対に不可能である。

そう。パソコン自身が自ら、そのプログラムを起動させない限りは。

「何なんだよ……もう」

そう言いながら、迅はその画面を見つめ――――――そして、あることに気がついた。

昨夜は？Ｍａｓｋ　ｉｎ？と描かれていたのが、今日は？Ｌｏｇ

ｉｎ？へと変化している。それが何を意味しているのかは解らないが、迅は興味本位でそれをクリックした。

きっと、悪質なサイトに繋がるとかそんなところだろうと考えていた彼へ――――――変化が現れたのは、実に唐突だった。

「な、ななな何だ！？」

？突然、身体が光りだした？。

この時点で、もう訳が解らない。

しかし実際に彼の身体は突如青白い光を発し始め、何やら文字列のようなものが体の表面を包み込むようにして次々と行き交う。

更に、パソコンの画面上にも変化が現れていた。

開いていたウインドウの上に描かれていた文字や絵柄が全て消え、ただ一言、こう記されていた。

？Ｃｏｍｐｌｅｔｅ．？と。

「う、うわあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

頭の整理ができぬ内に、迅の身体を一層強い光が覆った。

そして次の瞬間――――――迅の身体は、大きな光と共に忽然と姿を消す。

静寂の中、後に残ったベッドの上の目覚まし時計の針だけがカチリと音を立てて――――――誰もいない部屋の時間をただ1人、刻んだ。

☆★☆★☆★☆

気づけば、迅は暗い部屋の中でただ1人ベッドに横たわっていた。

「あれ……俺……？」

靄がかかったように重い頭を摩り、身を起こす。

「普通……だよな？」

突如頭の中に浮かんだ？非現実的？な光景を思い、部屋の中を見渡した。

しかし、特に思ったような異常は発見できなくて――――――迅は、安堵にほっと胸を撫で下ろす。

「そうか……やっぱり夢だったんだ」

そうだ。

あんな非現実的なことがあろうはずがない。

疲れていたし、ベッドに身を投げたまま寝てしまって、その間に夢でも見たのだろう。

そう結論づけ、迅はベッドの下に置いてあった漫画へと手を伸ばした。

確か、最近人気のファンタジー漫画だったように思う。

友人から勧められるがままに買ったそれは、未だ読まれることなく、レジ袋の中に入ったまま、ベッドの下へ無造作に置かれていた。

気分転換にはなるだろう。

そう考え、迅はセロハンテープを強引に手で引きちぎり、中身の漫画を取り出した。

――――そして、絶句する。その漫画に起きていた、有り得ない現象に。

「何、だよ……これ……」

手に取ったのは、至って普通の漫画本。

迅自身がベッドの下に置いたものに、まず間違いない。

――――絵柄や文字、その全てが、逆さまに描かれていること以

外は。

「どういうことだ……！？」

慌てて、中のページを捲る。

表紙だけではなかった。

中身も、絵だけでなく、吹き出しの中に書かれているキャラクターの台詞までもが全て、逆さまに反転していたのだ。

まるで、それらをそのまま鏡に写したかのように。

「一体、何が……！？」

何かおかしい。

そう、唐突に不安に駆られた迅は、居ても経ってもいられずに部屋を飛び出した。

慌ただしく階段を駆け下り――――――そして、気付く。周囲を取り巻く、異様な空気に。

「やけに静かだな……。母さん？　いるんだろ？」

いくら呼びかけても、先程まで階下にいたはずの母の返事は返ってこない。

恐ろしいまでの静寂に、一層の不安に支配され始めた迅は、手当り次第に1階を探し始めた。

きっと、どこかに隠れているだけ。

そんなことをする理由は解らないけれど、きっと自分を驚かせようと、妹の凛辺りが母に吹き込んだ性質(たち)の悪い悪戯なのだと、ありもしないことを自己暗示して、呼びながら1階を駆け回る。

しかし、少年の想いを踏みにじるかの如く、家の中は尽くしんと静まり返っていて、誰の気配も感じ取ることが出来なかった。

夕食の仕度をしているはずの母も、そろそろ帰ってきてもおかしくない凛も――――――誰も。

「どこに、行ったんだよ……くそっ、それにしても静か過ぎないか……！？」

この家は、住宅街とはいえ往来に面していて、この時間でもそれなりの数の車が通る。

本人達がいない以上、家の中の物音がないのは仮に認めるにしても、その音までもが、この不自然なまでの静寂の中へ消えていってしまっているのは、まるで自分以外の人間が全て消滅したかのような錯覚を抱かせ、迅に恐怖を抱かせる。

おかしい。

そう思った時には、迅は靴を履いて外へと飛び出していた。

「嘘、だろ……！？」

そして――――――呆然と立ち尽くした。

結論から言えば、外には誰もいなかった。

それどころか、まるで初めから誰もいなかったかの如く静かで、誰の気配もしない。

家の前から通りを見渡せば、不気味なまでに変わらぬ街並みが、ただどこまでも続いているだけだった。

「一体どうなってるんだ……！？」

訳も解らぬ絶望感に苛まれながら、すっかり静かになった街を歩く。

しかし、歩けど歩けど誰とも遭遇しない。

賑わっていた商店街へ行っても、この時間帯であればまだ部活動の活気が残っているであろう学校へ行っても、そこには誰の姿も確認することが出来ない。

――――――まるで、誰もいない世界に1人取り残されたようだ。

「ど、どうなってるんだよ……」

あちこち走り回った疲れに項垂れ、迅は大きな川の河原で辺りを見回した。

やはりというか――――――誰もいない。

人の気配がしない分、却って水の流れる音などが、より鮮明な存在感をもって響いている。

きっと、人類というものが全て消滅したとしたら――――――こんな感じなのかと、そんなことを漠然と考えてしまうのは、現実逃避と言えるだろうか。

しかし、自然とそんなことを連想させてしまう――――――そんな、静寂の最中だった。

呆然と立ち尽くす彼を、とてつもない衝撃が襲ったのは。

「おわああぁぁぁぁぁっ！？」

迅の背後、すぐ近くの地面が爆ぜ、爆風が彼を大きく吹き飛ばした。

炎の熱さが肌を嘗め、痛みが身体を駆け巡る。

何が起こったのかもまるで理解できぬまま、吹き飛ばされ地面を転がった迅がよろよろと立ち上がるのと同時に、男の高笑いが鉛色の空に木霊した。

「ははははははははっ！　最高だなぁ、最高の破壊力じゃねえかっ！　ははははははっ！」

「な、何だよ、あれ……」

人がいた！

そんな安堵すら抱いていた迅だが、それも一瞬のこと。

次の瞬間目に飛び込んできたものに、彼の表情は思わず引き攣った。

人がいた。なるほど、確かにそれは正しい認識だ。

筋肉質な身体を見せつけるかのような半袖と、口元だけ覗く仮面の下から立ち上る、くわえタバコの煙。

どこぞの特殊部隊よろしくな格好をした、長身の男。これだけなら、

まだ？日常？の世界に踏みとどまっていると言えよう。

――――――彼の肩に、身の丈ほどはあろうかというロケットランチャーさえなければ。

「お、おいアンタ！　街中でなんてもんぶっ放してるんだよっ！？
あ、明らかな銃刀法違反だろ、それっ！？」

「はぁ？　何言ってんだてめえ。てめえもマスカレイドの参加者なんだろ？　だったらこれくらいで驚いてねえで……さっさと戦えやっ！」

「はっ……？」

マスカレイド？　戦い？

訳の分からぬ単語が次々飛び出し、迅の脳内に疑問符が飛び交う。

本当に、訳が解らない。
いきなり人が忽然と消え、やっと巡り合えたと思ったら、それはロケットランチャーを構えた気狂(きちが)いな男。

夢の世界というならばまだ理解出来るが、ロケットランチャーの弾が爆ぜた際、肌を嘗めた爆炎の熱による痛みは紛れも無く本物。
決して目覚めぬ悪夢に混乱しつつ、それでもただ１つ、迅にも理解出来ることはあった。

それは――――――今、自分に向かって飛んできている弾は、一撃で自分の命を刈り取るのだということ。

しかし、如何せん足が竦んで動けない。

戦地で支援活動を続ける自衛隊など、泥沼の戦場を生き抜いてきたような人間とは訳が違う。

彼は、今までずっと彼自身の日常の中にいたのだ。

それが急に――――――こんな形で、単純明快、誰にでもそうだと理解できる命の危険に晒され、冷静に動ける方がおかしいのだから。

迫る死の予感に、迅は思わず目を瞑る。

これで終わったのだと、完全に諦めかけた――――――次の瞬間だった。

「……え？」

「なっ……」

迅の間抜けにも聞こえる声と、男の呆然とした声が重なる。

遅れて、先程まで迅と男との間にあったはずのロケット弾は――――――迅から見て、左の方の草むらに着弾し、爆ぜた。

「な……にが……！？」

助かった、という実感と安堵、そして何が起こったのか全く理解出来ない空虚感にも似た感情が同時に押し寄せ、身体の力が抜けた迅はその場にへたり込む。

一方、その光景を見ていた男は、好戦的な笑いを浮かべながら舌なめずりした。

「ほう……まさか、もう1人獲物に出会えるたぁ……ついてるぜ、俺は」

そう口にする男の目は、迅を見ているようで見ていなかった。

確かに視線は迅のいる方を向いているように見えたが、彼の目に映っているのは迅ではなく――――――。

「貴方の相手は……この私」

彼を守るように立ちはだかった、1人の少女だった。

顔には、男に似たデザインの、薄い紫色をした仮面を着けている。

「お、お前は……？」

「……下がっていて」

展開についていけない迅にただ一言そう告げると、腰まで届くほど長い黒髪を靡かせた仮面の少女は、男へ向けてゆっくりと歩きだした。

「はっ！　俺様に対して……無防備過ぎるぜっ！」

一見隙だらけに見える少女に、男は嬉々としてロケット弾を発射する。

しかし少女はそれを全く意にも介さず、ただ一言、何事かを呟いた。

「……アビリティ。？刹那（タイム・ルーラー）の支配者？」

次に迅が瞬きした後には、爆炎が先程まで少女のいた空間を焼き尽くす。

爆風に再び飛ばされそうになる身体を必死に耐え、迅の双眸は少女を探した。

あの一瞬の間に、移動できるであろう範囲を探すが――――――どこにもいない。

見つけることが、出来ない――――――。

「おいおい……！？」

あんな、自分と同じくらいの少女をも平気で吹き飛ばすことの出来る男。

明らかに普通ではない。

このままここに留まっていては、次にやられるのは自分だ。

煙が晴れ、露になった男の目が迅を捉え、好戦的に口元が歪む。

逃げなければ。

そう足を叱咤するが――――――死への恐怖が強すぎて、未だに膝が笑っていた。

「く、そ……」

なんとか這ってでも、男から逃げようとする。
男はそれを滑稽だと、厭らしい笑みを口元に浮かべながら、ロケットランチャーを構え――――――。
「……あ？」
――――――られなかった。
「捜し物は……これかしら？」
突如背後から聞こえてきた言葉に、男ははっとして振り返った。
あるはずがないと思いながら、しかし男の目に飛び込んできた光景――――――先程の黒髪の少女が、彼が手に持っていたはずのロケットランチャーを地面へ突き立てている――――――に、瞠目し後退る。
しかし、男もそのまま黙ってはいない。
「この……返しやがれ！」
我に返りそう怒鳴る男の手に光が収束していき、今度は機関銃がその黒光りする銃身を露にする。
そして光が収まると、すぐにトリガーを引いて乱射した。
それを待たずして少女の姿が一瞬にしてその場から掻き消え、何もない空間と男のロケットランチャーだけを、機関銃の銃弾が貫いていく。
「それで終わり？」

「くっ……舐めんなあああぁぁぁっ！」

自らの銃弾に爆散するロケットランチャーを背に、再び背後から聞こえる声へ向けて、振り向きざまに男は銃を乱射した。

しかしやはりというか、そこには既に誰もおらず――――――十数という数の鉛玉は虚しく空を貫く。

そして。

「なら……これでチェック、ね」

後頭部に冷たい金属の感触を感じ、男の背筋に冷たいものが走る。

突き当てられているのは、間違いなく銃。

幾度もその手触りを感じてきた男だからこそ理解できる。

今彼の頭には、冷たい死を齎すモノが突きつけられているのだ。

「……さようなら」

「っ！　ま、待っ……」

ドキュン。

男が何事か声を発する前に、少女の手に握られた銃が火を噴いた。

途端、光の粒子となって、男の身体が消え去っていく。――――――

それと同時に、男の身体によって遮られていた、ミルキーブルーの

宝石のような輝きを放つ銃身が、迅の場所からも見ることが出来た。

「ど、どうなってんだ……？　あいつ、どこ行ったんだよ……！？」

迅の声に、少女がそちらへ向き直る。

そして、表情を変えぬまま、ゆっくりと彼の下へ歩き始めた。

「お、おい……！？」

仮にも今、目の前で人1人をその手の銃で撃ったような人間だ。

思わず身体が強ばり、力の入らない足でへたり込んだまま後退る。

しかし、そんな状態で少女の歩く速度を上回れるはずもない。

あっさりと追いつかれ、少女の微動だにしない視線が迅を射抜いた。

吸い込まれそうな瞳に魅入る迅に、少女は仮面を外し、代わりにポケットから眼鏡を取り出してかける。

一瞬にして、非日常の世界に、日常に見るのと代わり映えしない、凛とした少女が完成した。

「……ようこそ、仮面舞踏会（マスカレイド）へ」

そう、微笑みながら差し伸べられた手が――――――少年には、女神の手に見えた。

第2話　【箱の中のセカイ】

「マスカ、レイド……」

少女に差し伸べられた手を取って、未だに笑っている膝を叱咤して何とか立ち上がった迅は、少女の口から出た言葉をそのまま繰り返すしか出来なかった。

聞き覚えのある言葉ではある。

しかし、それでもこの状況とどう関わりがあるのか、情報の圧倒的に不足している迅には知る由もない。

すると、訳の解らないでいる彼の心境を察したのか、少女は周囲を見渡しながら、ええ、と頷いた。

「貴方、その様子だとたぶん初心者だろうから、教えておいてあげるわ。ここは、プログラム？マスカレイド？の中。普段私達が住んでいるのとは、別位相に存在する異空間よ」

「は……？」

少女の言葉を聞いた迅は、先程の恐怖とは全く違う理由で言葉を失った。

「異、空間……！？」

「そう。俄（にわか）には信じられないことでしょうけど、ここはプログラム

によって生み出された空間。鏡のように全てが反対になっているのを見たでしょう？　それが、ここが現実の反転世界である証拠」

確かに、それは迅も実際に体験したことだった。

家にあった漫画だけではない。

街の商店街に軒を連ねる店の看板の文字なども、尽く逆になっていた。

なるほど、反転世界というのは的を射たネーミングだろう。

「信じるしか、ないのか……？」

そう呟きを漏らすが、信じるも信じまいも、迅は目の前で既に見てしまっているのだ。

男が、ロケットランチャーを射出する光景を。何もないところから、機関銃を現出させるのを。

男が――――――光となって消滅するのを。

それについて尚も問いを口にしようとする迅だったが、先に少女が口を開いたことで――――――何より、溜め息混じりに告げられたその内容によって、中断せざるを得なくなった。

「まあ、信じられなくても無理はないけれど……貴方、今すぐにでも思い知ることになるわよ？」

「は？　それって、どういう……」

聞き返そうとしたところで、ズン！と大きい地鳴りと共に揺れが２人を襲い、迅は思わずたたらを踏んだ。

「ほぉら……来た」

「来た？　来たって……」

何が、と続けようと、振り返った迅の目の前に――――――異様な光景が飛び込んできた。

いつもの街並みの景色の上――――――陸に、空に、無数の点が見えた。

それがただの点ではないことは、？それ？が段々とこちらに迫ってくることで明らかとなる。

「何だ、あれ……！？」

呆然とそれを見つめていた迅の目は今や大きく見開かれ、絶句していた口からは漸くそれだけが絞り出された。

無数の点に見えた物は、無数の異形。

あるものは、悪魔のような凶悪な体躯とコウモリのような翼を宿し。またあるものは、巨大な蜻蛉のような姿をし、巨大な複眼でぎょろりと辺りを見渡していたり。

また空からだけではなく、地上からも？彼ら？は押し寄せる。

触手を体中に伸ばした磯巾着のような生き物や、一周りも二周りも大きい狼のような生き物など、ありとあらゆる？非日常？が２人の下へ迫りつつあった。

「……貴方、マスクは持っているわね？」

「マスク？……あ」

少女の言葉に、何をこんな時に、などと思いながら身体を探ると、？それ？は自身の腰についていた。

それは、昼間学校で何故か鞄の中に入っていた、出所不明の紅の仮面。

この反転世界へ来ても全く代わり映えしないように見えるのは、仮面が非対称ではない所為か。

それをこの世界へ来て触った覚えもなければ、身に付けた覚えもない――――――が、今はそんなことを気にしている余裕すらなかった。

「それをつけなさい。……死にたくなければね」

それだけ言うと、少女は自身の仮面――――――薄紫色のそれを手に取ると、眼鏡を外し、再びそれを装着した。

男と戦っていた時の少女の姿は、黒のタンクトップにミニスカート、そしてそれを覆う黒のロングコートという黒づくめの妖艶な出で立ちをしていたが、今はどこかの制服らしいセーラー服一式に変わっていた。

それが、仮面を付けることで再び元の姿へ戻ると、少女は駆ける。

一瞬にして姿が掻き消え――――――気付いた時には少女は遥か前方、まさにモンスターと定義すべき異形達の群れと激突しつつあった。

「……これを、つければいいのか？」

迅は、未だ頭を支配している混乱を必死に鎮め、その手に握った仮面――――マスクを見つめた。

彼女が言うには、これを付ければこの場は助かる。

それは、今の彼女のように力を得ることが出来るということを表している。それは理解できる。

しかし。

（俺は……まだ怖い）

正直、膝なんかいつまた笑い出すか解らない。

（俺は、まだマスカレイドとかいうもののこと……何も知らない）

何も知らないまま戦うのも――――怖い。

（……でも）

でも、このままでは自分は死ぬ。

彼女は、大丈夫なのかもしれない。でも、あれほどの大群、自分を守りながら捌ききれる数ではないだろう。素人目ながら、そう考える。

自分がなんとかしようとしたところで、駄目かもしれない。

でも、それでも何もしないで後悔するよりはよほどいい。

そう思うと、何だかやらねばならないという気持ちになってきた。
やれるのではなく、やらなければならないのだ。
この場を、生き残るために。
「……くそっ。止めだ、止めだ！」
柄にもなく、物語の主人公のような思考になってしまった自分を振り払うかのように頭を振る。
そして、もう1度マスクを見つめた。
相変わらず、自らを鼓舞するかのような紅を放つそれの目が、鈍くも、雄々しく輝いて見えた。
「これで何も起きなかったら……承知しないからなっ！」
声を張り上げ――――――そして、一息にマスクを自らの顔に宛てがった！
すると。
「おわっ！？」
途端に、マスクが彼の頭に纏わりつく。
それだけではない。
先程まで着ていた真っ黒な学生服は消え去り、代わりに現れた漆黒の燕尾服を身に纏う。

背には、紅を裏地とした、燕尾服と同じ漆黒をしたマント。
まるで、変身ヒロインものの物語に有りがちなヒーローのような姿に変身した迅は、緊急事態にも関わらず自分の身体を触りながら姿を、感触を確かめていた。

しかし。自分の目の前にも怪物の群れが迫っていることに気付くと、舌打ちして踵を返す。

変化には、すぐに気付いた。

「あ……身体が、軽い……？」

それは、明らかな変化だった。

いつもより格段に早い脚力で、周囲の景色がどんどん後方へと流れていく。
常人では決して得られない身体能力に、迅は少女の言葉とマスクの力が真実であることを理解した。

しかし、それをもってしても怪物は完全には振り切れなかった。
空から襲い来る、悪魔とも龍とも似つかない容貌の魔物が、その鉤爪を振り下ろす。

「くっ、そおおおぉぉぉっ！」

逃げられないことを悟り、半ば自棄になって、迅は拳を魔物へ振るう。

魔物の力が、見掛け倒しでないなら――――――また、迅の身体能力が常人と何ら変わらないのであれば、まず間違いなくその拳は怪物へは届かない。
ある種、賭けだった。もし通じなければ、迅の身体は鉤爪に貫かれ、瞬く間にその命を散らしていただろう。

だが。結果は、迅の勝利という形で表れた。

動きが見える。
まるで手に取るように、本来速いはずの怪物の動きが解る。
それを半ば無意識に躱し、懐に飛び込むと、渾身の力でストレートを放った！

「グギャアアァァ！？」

拳が怪物の紫色をした体躯に突き刺さり、やがて吹き飛ぶ。

その凄まじい威力に、迅は唖然とした。

「何だよ、この力……！」

自らの手に入れた力に、訳も解らず手の平を見つめるが、怪物達は彼にそれ以上考える時間を与えようとはしなかった。

迅の拳に吹き飛び、動かなくなった仲間の身を案じる気もないようだ。
一斉に、死骸へ群がる蟻のように迅1人へ突っ込んでいく様はおぞましいものがあったが、迅は1つ1つの攻撃を的確に避け、拳を繰り出す。

元々、喧嘩殺法のようなもので形式ばったものではないが、腕っ節には自信のあった彼だ。未だ力の振るい方には雑な部分が多く見られるものの、とりあえずこの場を切り抜ける程の力は見せ始めていた。

「いける！」

拳を振るい、また1つ、巨大な甲虫のような姿をした怪物を吹き飛ばし、背後から棍棒を持って襲いかかろうとしていた、醜悪な姿をした人型の怪物を裏拳で沈める。

そのどちらもが、拳を受けた部分を大きくひしゃげて、弾丸の如く川の土手に激突して――――その後は、微動だにしなかった。

もうそこからは、迅の独壇場。

獲物は狩猟者に、狩猟者は獲物に。

両者の立ち位置が、完全に変わった瞬間だった。

拳が、蹴りが、全てを屠り蹂躙する。

恐怖心の欠片もない――――といえば、無論嘘になろう。

むしろ今振るわれている拳1つをとってみても、目の前の命の脅威に対し抱く恐怖心が、形になったものに他ならない。

だが、今はそれこそが、生きたい、死にたくないと恐怖する心こそが、今の彼の身体を動かす唯一の原動力となっていた。

やがて、辺りから魔物の息遣いが消えた。

あるのは、動くことを止めた――――――否、止めさせられた異形の残骸ばかり。

そして、その中心にいるのは迅。

息を切らし、今にも恐怖に震え上がりそうになりながら、高揚する心を抑えるべく、必死に息を整えようとしていた。

「終わったようね」

声と共に、迅のすぐ傍に降り立つ少女。

マスクを付け、身に纏う妖艶な黒装束には解(ほつ)れ１つ見えない。

付け焼刃で、ただ本能の赴くままに拳を振るっている迅とは雲泥の差だった。

何しろ、人生で初めて？命のやり取り？というものを経験したのだ。

そこにあったのは、現実に訪れる絶対的な？死？。

いろいろな感情がごちゃ混ぜになって、少女の言葉にも、いつもどおり返事を返すことも出来なかった。

それを理解してか、少女は迅の沈黙に特に何も言うことはなく、代わりに現状についての説明を始める。

「今の貴方は、力に目覚めたばかりでそれを満足に使えずにいる。

……それでも、あれだけのランブルの軍勢を蹴散らしたのには驚いたけれど」

「ラン、ブル……？」

「あの化け物達の名前。彼らはこの世界に住み着いて、この世界に訪れた参加者達を襲っている。ゲームで言う、モンスターみたいなものかしら」

あの、宝石のような輝きを前面に放つ銃を腰のホルスターに収めながら、少女は淡々と説明を続けていく。

自分とさほど歳に違いはなさそうな身でありながら、この状況にそこまでの冷静さを見せる彼女を心の内で賞賛し、それでも漸く幾分かは落ち着いてきた動悸を未だ必死に宥めながら、迅は尚も疑問を口にした。

「この世界は……一体何なんだ？」

「さっきも言ったでしょう？　ここは異世界。まあ、正確に言えば、マスカレイドが作り出した仮想空間、と言った方が正しいのかもしれないけれど」

「その、マスカレイドっていうのは？」

「マスカレイドのことは、私もまだよく解っていない。解っているのは、あれが私達に戦いを強いるシステムであるということだけ」

「戦いを……強いるって……」

つまりは、強制的に戦わせられるなんらかのシステムがあるのだということ。

その中身を知らない迅はただ呆然とするが、それを見た少女は明らかなため息をついた。

「な、何だよ」

「……貴方、？規約（ルール）？は読まなかったの？」

「ルール？」

「マスカレイドプログラムを立ち上げた画面に出ていたはずよ。この世界から出たら読んでおきなさい。この先も、死にたくなければね」

「またそれかよ……」

先程からそうだが、この少女の対応はどこかどっちつかずだ。

情報を与えてくれているのだから悪い人間ではないのだろうが、これほど無感情にただ与えられる情報に、迅の思考は、刻々と変化する状況から未だ置いていかれたままだった。

そうして少女に訝しげな視線を浴びせていると、件（くだん）の彼女は不意に踵を返し、歩き始める。

ちょうど、迅が歩いてきた方の方角へ。

「お、おい！　どこ行くんだよ！？」

「家」

「……は？　でも、この世界の家って、俺たちの世界とは……」

「ええ、勿論この世界の建物は私達の世界にあるものをそのまま反転させて存在しているに過ぎない、巨大なミニチュア。私達マスカレイドの参加者は、マスカレイドプログラムにログインしたパソコンからしか元の世界には戻れない。……今の貴方では、おそらく雑魚ランブル相手にもそう長くはもたない。私が送ってあげるわ。家はどこ？」

「あ、家って、そういうこと……」

てっきり、彼女自身の家のパソコンへ向かうのだと勘違いをしていた迅は、現在唯一頼りに出来る存在に出会えた奇跡に感謝した。――――と同時に、まだ全てが終わっていないにも関わらず、思わず力が抜けそうになった。

と、そんな彼の内情を知ってか知らずか、少女は構わずさっさと歩き出す。

「あ、ちょっと待てって！」

慌ててその後を追う迅。

こうして迅は、初めての反転世界で、初めての仲間との邂逅を果たした。

☆★☆★☆★☆

「はっ！」

一閃。

クリスタルの銃から放たれた銃弾が、下級悪魔の姿をしたランブルを撃ち抜く。

迅と少女の2人は現在、商店街を進んでいる最中だったが、ただ素通りというわけにはいかなかった。

商店街には悪魔系のランブルが巣食っていて、進路を阻み、襲いかかってくるものは一瞬にして少女の鉛玉の餌食となる。

少女がランブル達を蹴散らしていくその後ろから、燕尾服にマントという、現実にいたら仮装と間違われるか、異様なものを見る目で見られるかのいずれかであろう姿をしたままの迅が続いた。

（凄い……）

前を走る少女の背中を見つめながら、迅は心の中でそっと彼女を賞賛した。

攻撃には一切の迷いもない。
銃弾は全て吸い込まれるようにランブル達を真芯から捉え、その全てを無力化させていく。

加えて彼女の力、？刹那（タイム・ルーラー）の支配者？。

彼女によれば、マスクにはそれぞれ特殊な能力が１つ設定されており、刹那（タイム・ルーラー）の支配者は彼女のマスクの力。

その正体は、一定時間、常人より遥かに速い時間の流れに身を置くこと。

長時間の維持は身体への負担が大きいらしく、そう長くは発動状態を保てないそうだが、それでも十分に強力な能力であることは、迅にも十分に理解できた。

一瞬でも加速して敵の死角に回り、銃を当てられればそれでもう終わってしまうのだから。

能力のことを聞いた今なら、男と戦った時のあの少女の動きのトリックもまた、容易に理解することができた。

そうして、今は守られながら先を行く彼女の後ろを駆け抜けながら、彼女が偶然撃ち漏らしたものを、拳で殴りつけて吹き飛ばしていく。

やはりというか、全てが全て、一撃で屠れるというわけではないらしい。

中には全力で殴っても倒しきれないものもいて――――――しかし、

吹き飛んでいくそれらをそれ以上深追いはしない。
今ここを走っているのは、彼らを倒すこと自体が目的ではないのだ。
「この先、もうちょっといけば商店街を抜けて住宅街に出る。そこの、空色に塗られた外壁の家が俺の家だ！」
「解った」
迅の指示に少女は短く返しながら銃を撃つ。
そうして真っ直ぐに駆け抜けた先に、元来た閑静な住宅街が見えてきた。
尤も――――――。
「グゴオオオォォォォォォォッ！」
その中に聳える巨大な影に、いつもどおりの様相を呈しているはずの町並みも、もはや見る影もなかったが。
「で、デカい……！」
現れたのは、家ほどの大きさもある石で出来た巨人。
現実世界のゲームに喩えるなら、ゴーレムとでも呼称すべきだろうか。
ともかくそのゴーレムが、天を見上げ、大きく咆哮を上げ、アスファルトの道路を闊歩しているのだ。

これまでのランブルもそうだったが、現実の風景とファンタジーな魔物達とのコントラストは、迅の目には実に奇妙に映った。

「……あら、ランクB」

「は？　ランク？」

「ええ。ランブルにもランクがあるのよ。貴方が漸く倒していたランブル達は皆、最低ランクのランクD」

「あ、あれで一番弱いのかよ……」

必死に拳を振るって倒したものが、最低ランク。

彼にとってはこれが全くの初陣であるということを考慮に入れても、迅はその事実に決して小さくない衝撃を感じていた。

しかも彼女の話によれば、目の前のゴーレムのランクはB。

迅が相手にしていたランブルのランクを、2つも上回る。

「でも……おかしい。ゴーレムがこんなところに現れるだなんて。あれほど大量に集まったランブルといい……一体、何が起きているというの……！？」

何が気になるのか、そう考え込む少女。

彼女の言葉からして、これほど沢山のランブルが現れるのは彼女にとってもイレギュラーな事態のようだが、そんなことを気にしている余裕は迅にはなかった。

この辺りに他のランブルはいないようだが、目の前には進路を塞ぐようにゴーレムが陣取っており、背後には溢れるほどの下級ランブル。

迂闊には踏み出せないが、逃げることも困難。まさに、背水之陣と形容すべき事態だ。

ともなれば、目の前のゴーレムを突破してなんとかして家に転がり込むのが最善なのだろうが、果たして少女の銃と自分の拳だけで、あの石の巨人を相手に出来るのだろうか。

「なあ、どうする？」

不安をかき消すように、迅は少女に意見を求めた。

この世界とマスクの力に関しては、彼女の方が詳しい。故に何か解決策を聞ければと問いかけたのだが、それに対する少女の返答は実に単純明快、シンプルなものだった。

「下がってなさい」

「……は？」

てっきり、何か気の利いた策を弄してくれると思っていた迅は、思わぬ返答につい間抜けな声を挙げて問い返してしまう。

「私がやるから」

「私がやるって……お前、あの巨体相手にその銃１つで向かってくつもりかよ！？」

「そうよ」

無茶だ。勝てるわけがない。

そう考えてしまうのも、この体格差と石の硬さを知っているからか。

しかし迅はこの後、その心配が全くの杞憂であり、その読みが、状況から得られる先入観に過ぎないことを知る。

見てなさい、とだけ言い残し、少女はゴーレムの前へ悠然と歩いていく。

それに気付いたゴーレムは再び1つ咆哮を上げると、ゆっくりと右腕を振り上げ、そのまま重力に任せて振り下ろした！

「おいっ！？」

アスファルトが、拳が当たったところからクモの巣状に罅割れるのを見て、迅は思わず声を上げた。

あんなものが、もし直撃でもしようものなら――――――。

そう考えるとぞっとした。

だが、迅の心配を他所に、砂煙に紛れて少女の姿が現れる。

瞬間的に刹那（タイム・ルーラー）の支配者を使ったのであろうことは、迅にも予想は出来た。

あれ程の巨体だ。

拳1つ引き戻すにも数秒のタイムラグを要するらしく、その間に瞬間移動が如く彼の目の前に躍り出た少女は、銃を構えた。

銃口は、真っ直ぐにゴーレムへと向けられている。

何をするつもりなのか、憂う視線で見つめる迅の目の前で、少女の身体が僅かに光を帯びた。

青白く、どこか神秘的にも見えるその光は銃にも浸透していき、空色の銃身を一層の青に輝かせる。

そして。

「ガアアアァァッ！？」

突如銃から放たれた、彼女が纏うのと同じ色を帯びた光の弾丸が、ゴーレムの胴を貫通。悲鳴にも似た咆哮を上げて、ゴーレムは風穴の空いた胴を庇うようにしてたたらを踏んだ。

効いている。

迅に理解出来たのは、そこまで。

彼女が何をしたのか、何が起こったのかなどということは頭にない。

ただ――――――勝てるかもしれない。生き残れるかもしれない！

そのことだけが、少年の思考をすっぽりと被っていて、その生がどういった形でもたらされるかなど、その時は全く興味すら湧かなかったのである。

苦しみに震えながら、ゴーレムは引き戻した拳を再び振り下ろした。
しかし少女は冷静にそれを見据えながら、再び刹那の支配者（タイム・ルーラー）の力を使い、最低限の動きと発動時間で避け、お返しとばかりに銃弾を放つ。
今度は、肩。
支えを失ったゴーレムの右腕が、大きな音を立ててアスファルトに崩れ落ちていった。
「凄い……！」
思わずそう呟きを漏らし、迅はそっと息を呑んだ。
テレビアニメやゲームなどで、幾度となく見てきた？フィクション？の世界。それが今、目の前で？現実？として繰り広げられている。
まるでそれは夢のようで――――――しかし、ゴーレムが暴れることで巻き起こる衝撃は間違いなく本物だった。
眼前で、次々に解体されていくゴーレムの巨躯。
それを迅はしばし、希望の見えた歓喜に、口元を笑みに歪めながら眺めていたが――――――ふと視線を移すと、異様なものが目に飛び込んできた。
（何だ、あれ……）
ゴーレムの巨躯に気を取られて今まで気付かなかったが、ゴーレム

の脇に、不自然な石のブロックが見えた。
最初は、家の塀の類だと思っていた。が、ここで長いこと生きてきた迅には解る。
あの家の軒先に、あんなものはなかった。あの家は確か、蛇腹式のゲートを経て道路に面していたはずなのだ。
だとすれば、あれは――――――。
「これでっ……！」
そんなことを考えていると、ふと見れば、少女の側はゴーレムを粗方無力化し終えた後で、一層大きな光弾を放つ直前だった。
すると、それを狙っていたかのように、ガラガラと音を立てながら、脇にあった石のブロックが急速に形を変えていく！
「危ないっ！」
「っ！？」
石の塀は変形し、もう1体のゴーレムとなって、少女を掴み上げようと手を伸ばす。
物音と迅の叫びに、少女も漸く事態に気付いた。
が、遅い。
既に銃のエネルギーはゴーレムへ向けて集束を完了しており、今更新手を迎撃する手は残されていない。

また、新手のゴーレムの迎撃へ銃を向けたとしても、唯一残った左腕を今まさに振り下ろさんとするゴーレムを迎撃しなければ、どの道彼女の身が危ない。

「ちぃっ！」

気づけば、己が身も顧みず、迅は飛び出していた。

完全に、無意識の間の行動。

しかし迅の身体が今少女と塀のゴーレムとの間に割り込んでいるのは現実であり、迅には既に、その石の腕を迎撃するしか道は残されてはいなかった。

≪はあああああぁぁぁぁぁぁぁっ！≫

2人の咆哮が重なり、拳と光弾、本質を違える2つの閃光が煌めく。光を纏ったのは、少女だけではない。迅の拳もまた、淡くはあるが青白い光を纏っていた。

同時に巨躯を捉えられた2体のゴーレムは、やがてその双眸から光を失い――――大きな音を立てて、崩れさっていった。

「……っはあ、はぁ……！」

緊張の糸が切れたのか、迅は拳を振りかぶった体勢を崩し、尻餅をつく形で後ろ向きに倒れ込んだ。

死ぬかもしれない状況で、無我夢中だった。が、不本意そうであったとはいえ、自分の命をここまで助けてくれた少女が目の前で死ぬ

のは見たくない光景であった。

それを考えると、彼女を守れたのだという実感が、確かな充足感となって満ちていくのが解る。

安堵した途端に足腰立たなくなった自分の姿は情けなかったが、最大限の努力が実った実感と喜びだけは、確かなものだった。

「大丈夫？」

声にそちらを向けば、口元に微笑みを浮かべながら、少女が手を差し伸べてくれていた。

迅は一瞬迷った後、自身の状態を思い出すとそれを手に取って立ち上がった。

ふらついた身体を、すかさず少女が支えてくれる。

「はは……情けないよな。一回ぶっ放したくらいでこれだ」

「いいえ。初めて戦いを経験したのだもの。これくらい当然よ。……ううん、それどころか、あの状態で動けたこと自体が奇跡に近いわ。ありがとう」

「あ、ははっ……」

乾いた笑いが自然に溢れる。

彼女の礼に対する喜びと、命を勝ち取った安堵が綯交(ないま)ぜになった末の、苦しい笑みだった。

「さあ、これで邪魔者はいなくなったわけだけれど。貴方の家はどこかしら？」

「あそこだ。もう見えてる」

迅の指さした先にあるのは、紛れも無く彼自身が飛び出してきた自宅。

少女に担がれながら、迅はゆっくりと玄関を目指した。

傍から見ればこの上なく情けない格好であるとは解っていたが、仕方なかった。

未だ腰は立たず、自力ではまだまともに歩けそうになかったのだ。

玄関を抜け、誰もいないリビングを通り過ぎ、階段を上がるまでをたっぷり5分費やし、漸くのことで2階へ上がると、自室のドアを開けた。

「へえ、案外片付いてるのね」

「放っとけ」

部屋に入るなり、表情も変えず率直な感想を述べる少女にすかさずつっこみをいれながら、迅はベッドに倒れ込むようにして座り込んだ。

その、いつも感じていた布団の柔らかな感触が、非日常に塗れかけていた思考を癒してくれるような気がして、迅は深く溜め息をついた。

「で、これからどうするんだ？　パソコンはそこにあるけど」

そう、思考を落ち着けたところで、迅は改めて少女に問いかけた。

机の上のパソコンは、相変わらずマスカレイドの起動画面を表示したまま、画面から光を発し続けている。

唯一この世界に来る前との相違点といえば、ログインの文字がログイン中になっているところくらいだろうか。

「簡単よ。マスクを、画面にかざせばいい。逆に現実世界からこの世界へ来たい場合も、同じようにマスカレイドプログラムを起動させてから、マスクを画面にかざせばいいわ」

「こんな世界、2度と来たくないよ……」

おどけたように肩を竦めてみせる迅。

しかし少女はそんな彼の言葉に同意することはなく、首を横に振った。

「それは無理ね」

「……は？　どうしてだよ？」

「言ったでしょう？　このマスカレイドは、戦いを強制するシステム。たとえ戦いたくなくても、それを強いるだけの仕組みが備わっている」

「それって……」

何だ。

そう続けようとして、ふと自分の身体が光に包まれていることに気づき、言葉に詰まった。

何が起こっているのか、それはすぐに理解した。

立ち上がった拍子に仮面が無意識のうちにパソコンの画面の前にあり、ログアウトとみなしたマスカレイドプログラムが反応しているのだろう。

やがて全身が光に包まれた迅の身体は、僅かな光の残滓を残したまま、この世界から尽く消え去った。

「……はぁ」

1人残された部屋の中で、少女は1人溜め息をつく。

それは、不可抗力とはいえ話の半ばで去ってしまった彼の無礼に対してのものか、それとも無事彼を送り届けることが出来た安堵故のものか。そればかりは、彼女にしか解らない。

少しの間穏やかな静寂に身を預けると、やがて少女は静かに風上家を後にした。

☆★☆★☆★☆

翌日。

現実世界へ戻ってきた迅は、いつものように通学路を歩いていた。
隣にはこれもいつもの如く、愛らしい笑顔で並び歩く雛の姿がある。
昨日あれほどのことがあったというのに、現実の世界はそんなことを歯牙にもかけず回っていた。
魔物で溢れかえっていた街は、今では代わりに人が埋め尽くしている。
いつもどおりであるはずなのに、あまりにも非常識な昨日の光景が頭から離れない所為か、迅の目にはそんな日常の風景さえも、異彩を放って見えた。

「どうしたの、迅君？」

「……あ？」

ふと、笑顔を浮かべて歩いていたはずの雛が、きょとんとした顔で迅の顔を見上げているのに気づき、迅は歩を止めて彼女を見た。

「なんだか、さっきからぼーっとしてるよ？　具合でも悪いの？」

「あー、いや。そういうわけじゃねえよ。ちょっと考え事しててな」
「そうなんだ。迅君がそんな考え込むなんて珍しいね。私でよかったら相談に乗るよ？」
「ああ、大丈夫。大したことじゃねえから」
あくまで？いつもどおり？を装って、いつもどおり、自分より少し背の小さい彼女の頭を撫でる。
その、日常と非日常が混在し矛盾した行動をとりながら自嘲した笑みを浮かべている迅と、そうとも知らず目を細めてそれに従っている雛の下へ、景気のいい声が投げかけられた。
「やあやあ。毎度のことながらお熱うございますなぁ！」
「あ。絢香ちゃん、おはよー」
迅に撫でられた姿勢のまま、元気よく手を挙げて、後ろからひらひらと手など振りながら歩いてきた絢香へ挨拶する雛。
それとは対照的に、胡散臭いものを見るような目をしながら、迅は絢香の言葉を否定する。
「だから。何度も言ってるけど、こいつと俺はそんな関係じゃないんだっつーの」
「むふふ、むきになって否定するところが余計に怪しいなー♪」

「はっ。乗せられやすい誰かさんじゃあるまいし、誰がむきになんてなるかって」

「何をーっ！？」

「ほら、な」

「あ……」

まるで漫才のようなやり取りを交わす2人に、雛は頭から離れていく迅の手を物足りなさげに眺めながら、呟いた。

「2人共、相変わらず仲いいね」

「雛……私達のそれも、ちょっと違うかなー、なんて……」

「ああ、それについては俺も同感。どっちかっていえば、腐れ縁って感じだよな」

「？」

2人の言っていることがいまいち理解出来なかったのか、きょとんとしたまま小首を傾げる雛に、迅と絢香は揃って溜め息をついた。

それから3人は、揃って学校まで何気ない雑談をしながら歩き、教室へと歩いていく。

「そういえば、転校生が来るのって今日だって言ってたよな、絢香？」

「ああ、うん。そういえばそんな話したっけ」

「え、転校生が来るの？」

「うん。どんな子かなぁ」

言いながらいつもの如く迅の机に集まり、雑談をして過ごす。

今日はいつもより少々遅く家を出たので、ホームルームまでの空き時間はそれほど長くはない。

話し始めてそれほど経たない内にもう予鈴が鳴り響き、雛と絢香は自分の席へ帰っていった。

（さあて……噂の転校生の顔、拝ませてもらおうかね）

そうほくそ笑んでいると、やがて教室のドアが開いて担任の教師が中へ入ってきた。

転校生は――――――まだ外だろうか。

「はい、静かに。今日はホームルームを始める前に、転校生を紹介しよう」

担任教師の言葉に、噂を聞いていなかった者も、聞いていた者も等しく沸き立った。

ざわざわと喧騒が広がり始めた教室を、大きな声で再び鎮めると、担任教師は廊下へと呼びかける。

「いいぞ。入ってきなさい」

「はい」

（……ん？）

廊下から、やけに存在感をもって耳に届いてきた凛とした声に、迅の思考が止まった。

まさか。そう思うも、あの透き通った声と、流れるような長い黒髪は忘れるはずもない。

すました顔で教室に入ってきた少女が、すらすらと黒板に名前を書いていくのを、迅は呆然と眺めるしかなかった。

「小波（さざなみ）　鈴奈（れいな）です。宜しく」

無表情に短く自己紹介を済ませた少女――――――小波　鈴奈は、紛れも無く、非日常の世界で出会ったあの少女だった。

第3話　【氷の転校生】

「……」

ホームルームが終わり、1時限目の現代国語の授業に移っても尚、迅は平常通りの思考を取り戻せずにいた。

視線が向く先は言うまでもなく、彼の斜め前の席に座る黒髪の少女――――小波　鈴奈。

どうして、という疑問も勿論あるが、彼が今最も感じているのはやはり、驚愕。

昨日の今日だ。あんな出来事があって、正直なところ、自分には関わりないこととして早く忘れてしまいたいとすら思っていたのだ。そのために、彼女の言っていたマスカレイドのルールとやらも碌に確認せずに、昨夜は珍しくパソコンに触ることすらせず早々に眠りについた。

――――なのに。

その矢先の彼女の登場。

驚愕と不安。2つの感情が入り乱れて、迅は落ち着かなかった。

そして、昼休み。

いつもなら、零次や雛、絢香を誘って心休まる昼食タイム、といきたいところだが、どうにも煮え切らない思いの迅は、ついに鈴奈を屋上へ呼び出した。

転校初日故か、彼女を取り巻いて質問攻めにしているクラスメイト達には奇妙な目で見られたが、そんなことはその時の迅には関係なかった。

「……いつか、来るとは思ってたわ」

屋上へ着き、迅が誰もいないことを確認し終えたその時、鈴奈がまずそう切り出した。

「じゃあ、俺が訊きたいことも当然理解してるだろ？」

「ええ。まあ、私もまさか貴方とこんなところでまた会えるなんて、思ってもいなかったけれど」

「じゃあ、俺を狙ってきた、とかじゃ……」

さり気なく感じていた懸念を口にすると、鈴奈は躊躇いもなく首を横に振った。

「私は他のプレイヤーとは違う。自分の利益のために他のプレイヤーを殺すことはしないし、したくもない。私が狩るとすれば、あくまでもランブルだけよ。第一、貴方を狙っているのなら、昨日の時点で私は貴方に銃口を向けていたわ。助けるまでもなく、ね」

「……それもそうか。でも、せめてこの学校に来た理由くらいは聞かせてもらいたいな。昨日の今日だ、何か目的があってのことなんだろ？」

「……へぇ」

迅が問うと、鈴奈は薄ら笑いを浮かべて、まじまじと彼の姿を見た。その視線にどこか冷や汗の流れる感触を感じながら、迅は訊く。

「な、何だよ」

「いいえ。貴方、案外切れるのね」

「馬鹿にしてんのか？　それくらい俺にも解る」

「そう。ごめんなさい」

謝りながら、全く反省していない声音に、早くも迅はこの少女の人となりを感じ取っていた。

少なくとも、口で容易に勝てる相手ではなさそうだ――――――と。

「私がここに来た理由。簡単に言えば、私の目的のため、とでも言えばいいかしら」

「目的？　何だよ、それ」

「さあ？」

「さあ、ってお前な……」

呆れたように頭を掻く迅に、鈴奈は表情も変えずそっぽを向いた。

何かあるのは確か。だが、どうあっても話さないつもりなのだろう。一見無表情に見えるその顔には、そんな意思がありありと表れていた。

が、当の本人はそんなことは些細なことだとばかりに、ところで、と迅の顔を覗き込む。

「貴方の方はどうなの？」

「どう……っていうと？」

「マスカレイドに選ばれた以上、貴方はもう戦いの呪縛から逃れられない。そんな自分の命を握られたも同然のあのゲームのルールを、貴方はもう把握したのかしら？」

「そのことだけど……未だに信じられない。要はあの世界に行かなければいいだけの話なんじゃないのか？」

そう訊くと、鈴奈は呆れたように大きく溜め息をつく。

何かおかしいことを言ったかと、迅が訝しげな視線を送っていると、鈴奈は真っ直ぐに迅の目を見て言った。

「貴方、どうやらルールは読まなかったみたいね。……まあいいわ。だったら教えてあげる」

言って、鈴奈は屋上の奥まで歩いていくと、柵に身を預けた。
眼下に広がる街並みに視線をやったまま、鈴奈は少しずつ説明を始める。

「誰がやっているのか、どういった基準で選ばれているのかすら解らないけれど、何者かによって選定された人間のパソコンに、強制的にダウンロードされるプログラム。それがマスカレイド。マスカレイドプログラムはマスクを与え、マスクの所持者は反転世界へ出入りする権利と、特殊な力が与えられる。私の刹那（タイム・ルーラー）の支配者も、その１つ」

言いながら、どこから出したのか自身のマスクを弄ぶ鈴奈。
相変わらず紫のそれは、自分やあのロケットランチャーの男が持っていたものと、やはりよく似ていた。

「マスカレイドとは、生き残りをかけたゲーム。参加者は反転世界を舞台に、与えられた能力を用いて戦うの。勝てば、その戦績に応じた利益が与えられるわ。その形は、お金だったり、地位だったり、参加者の願いによりけりだけれど」

「じゃあ……負ければ？」

少女の言葉に、迅が当然の疑問を口にする。
話を聞いている分には、強制的に参加させられる以外には、ただリアルなだけのゲームという認識にしかならない。しかもそれで利益を得られるというのであれば、いいこと尽くめだ。

だが、得てしてそういう話には必ず裏がある。
メリットが大きければ、それ相応のデメリットというものが当然存在するはずなのだ。
そして、そんな迅の読みは正しかったらしく、鈴奈は未だ表情を変えぬまま答えた。
「……あの世界で死んでも、現実のゲームのように生き返ったりはしない。正真正銘、あの世界での死は現実の死に直結するわ。しかもただ死ぬわけじゃない。文字通り、？消える？のよ」
「じゃあ、アンタが撃ったあの男も……」
「……もう、毛の一本も残っていないでしょうね」
つまりは、彼女の言うとおり？消滅？したということ。
それを淡々と告げる鈴奈に、次第に怒りがこみ上げてくる。
気づけば、迅は彼女に掴みかかっていた。
強引に柵から引きはがし、胸ぐらを掴む。
「アンタ……よくそんな平然としていられるなっ！　人が死んでるんだぞ！？」
「そうしなければ、私達が殺されていたわ。私も……貴方もね」
迅の剣幕にも微動だにせず、冷たい眼差しで真っ直ぐに迅の瞳を見

つめる鈴奈。

鋭い目付きも相まって、気の弱い者であれば一瞬にして縮こまるところを、彼女は一切何も感じていないのか、動じることも一切なかった。

否――――実際、その程度では動じる必要もないのだろう。

これまで多くの非日常の世界を経験した彼女は、この程度では揺るぎもしないのだろうと、迅は勝手に推測を立てた。――――否、きっとそうなのだ。

と、そう思うと自分の行動が急に虚しくなって、気づけば胸ぐらを掴んでいた手で突き飛ばすように解放していた。

「それに、あんなふうにあの世界に取り込まれた戦闘狂（バトルジャンキー）は、言うだけ無駄よ。いずれにせよ、戦い続けた末に誰かに倒される。そういうふうに出来ているの、アレは」

乱れた服を整えながら言う鈴奈の言葉に、ふと疑問に思ったことを迅は訊ねた。

「お前は……お前は本当に、殺したくなんてないんだな？」

「当たり前よ」

きっぱりと言い放つ彼女の表情から読み取れるのは、確固たる信念と、その裏に見える、殺人への恐怖。

故に、それ以上迅もそのことについて問うことはしない。

ならば次の質問へと移るべきだと、迅は話の本筋へと切り出した。

「戦いの仕組みは理解できた。でも、やっぱりそれだけだと戦わなければいけないっていう意味がわからないんだが……」

「……戦うごとに褒賞があるように、戦っていないものには、ペナルティを課される仕組みになっているの」

「ペナルティ？」

「一定期間戦績を上げない者には、デリートと称した粛清が起こる。……勿論、戦っていたとしても結果が出せなければ、同じことが起こるわ」

「デリート……」

パソコンのユーザーである迅に、その言葉の意味が理解できないはずもない。

デリート――――――つまりは、？消去？されるのだ。

そしてそれは、現実の？死？へと繋がることくらい、迅にも容易に連想できた。

「なんか……実感湧かないな。急にそんなこと言われても……」

「湧こうが湧きまいが、事実よ。消えるのが嫌なら、定期的に反転世界にログインして、ランブル狩りでもすることね。プレイヤーと比べると、得られる経験値も褒賞も、微々たるものだけれど」

「え？　戦績って、ランブルでも得られるのか？」

「ええ。さっき言ったとおり、得られるメリットは微々たるものだけれど、ランブルを狩るだけでもペナルティによる死は回避出来るわ。……尤も、リターンの大きい他プレイヤー狙いのプレイヤーや、ランクの高いランブルもたまに出現するから、全く安全な方法というわけではないでしょうけど」

昨日のロケットランチャーの男の消滅を見て以来、マスカレイドの中では人の死が必然であると決めつけていた迅には光明が差すような思いだったが、それでも実感ははっきりとは感じとれないというのが現実だった。

昨日感じた恐怖もどこへやら、現実に戻ってくると、「自分とは関係ない」という気持ちが強くなってくるのだ。

そうして、そこまで話したところで、次の授業の予鈴が響いた。

「後は、ルールを読んでおきなさい。死にたくなければね」

そう言い残し、鈴奈はもう用はなくなったとばかりに、足早に屋上を後にする。

もう、その言葉を聞くのは3回目だろうか。

そんなことを漠然と考えながら、鈴奈が去った後の屋上から1人、迅は陰鬱な気持ちを晴らすことができぬまま、逃げるように立ち去っていった。

☆★☆★☆★☆

そうこうしている内に、放課後になった。

午後の授業も相変わらず、迅の頭に入ってくることはなかった。彼の思考を満たしているのは、昼休みに鈴奈から聞いた言葉。

ペナルティ。そんなものがあるとは、考えもしなかった。

確かにそれなら、戦う気のない自分のような人間でも、戦わざるを得ない。誰だって、死にたくなどないのだから。

だが、彼女の提示した最大の打開策であろうランブル狩りも、完全に安全とは思えない。

彼女の言ったとおり、他のプレイヤーを殺すことに躊躇いのない、戦績による利益本位のプレイヤーが狙ってくることも十分に考えられるし、ランブルの中でもランクが高く、強い個体が現れようものなら、弱いプレイヤーでは一溜りもないだろう。

少なくとも今の自分では、昨日のゴーレム1体とすら満足に戦えないであろうことは理解しているだけに、迅は陰鬱になりつつある思考を隠せないでいた。

「どうしたの、迅君？」

「おわっ！？」

と、蜘蛛の子を散らすように教室を出ていくクラスメイト達の中、物憂気に考え込んでいる迅の姿を訝しんだか、突然視界に割り込んできた雛の顔に、迅は思わず椅子から転げ落ちてしまった。

「だ、大丈夫？」

「いてて……いや、こっちこそ驚かせてすまん。で、どした？」

「あ、うん。今日は零次君も絢香ちゃんも用事があるみたいだから、一緒にケーキでもどうかなって」

「絢香はともかく、零次が用事ってのは珍しいな……」

絢香の家は酒屋をしていて、頻繁に家の手伝いに駆り出されていたから、そう考えればいくらでも納得がいくが、零次の家は迅と似たり寄ったりの普通の家庭であり、特に用事といっても思い浮かばなかった。

が。

「新しいゲームが出るとかで……」

「……ＯＫ、よく解った」

雛の言葉で、あっさり疑問は氷解した。

なるほど、確かにそれなら彼にとっては十分に?用事?だろう。

迅も人並みにゲームで遊ぶこともあるが、零次のプレイするものは迅のやる、所謂一般向けのゲーム機で遊ぶテレビゲームではなく、パソコンにインストールして遊ぶような玄人向けのもので、特にオタクの自覚のない迅には到底付き合えそうのない代物だ。

だから、特に彼に付き合おうとも思わないし、彼の方も迅が興味を示さないことはこれまでの付き合いで把握しているから、特に誘ってもこなかったということだ。

しかし、そういうことなら気兼ねもない。

鞄に荷物を詰めると、陰鬱な気持ちを吹き飛ばそうとするが如く、迅は雛と共に教室を出る。

その姿を、教室の窓辺に寄りかかっていた鈴奈が、無表情に見送っていた。

☆★☆★☆★☆

「あれ、迅君じゃないか」

「え？」

ケーキ屋で家族への土産のケーキを買った後、家路についた迅を柔らかな男の声が呼び止めたのは、既に日も傾き始めた頃だった。

振り返った迅の下へ、人の良さそうな笑顔を浮かべた中年の男が歩み寄ってくる。

初めは、誰か判断もつかなかった。

だが、男が近づいてきて彼の顔形が視界の中で鮮明になるにつれ、迅の中の記憶も徐々に鎌首をもたげてきた。

「あ……井出先生？」

「そうそう！　久しぶりだねぇ、元気だったかい？」

いよいよ迅の記憶の表層に登ることとなったこの男の正体は、迅が中学生の頃、よく世話になった数学の教師だった。

一度クラスの担任になった後、何かと気にかけてくれた上、相談にも乗ってくれた、云わば迅にとって頼りになる恩師であった。

「先生こそ、お元気そうで何よりですよ」

「はは、まあね。相変わらず、難しい年頃相手に四苦八苦してるよ。

迅君は？　最近、どんな感じだね？」

「まあ……可も無く不可も無くってところです」

「それは何よりだ。うん、何かあるよりはよほどいいに違いないよ。まあ、活躍があれば尚いいんだがね」

「あはは、耳が痛いです……」

申し訳なさげに頭を掻く迅に、男が――――――また迅自身も、声を上げて笑った。

こんな会話も、どれくらいぶりだろうか。

以前は幾度も交わしていたはずなのに、たった数年経っただけで酷く懐かしく思えていた。

あの当時も、学校の廊下と道路の違いはあれど、よくこうやって話しかけてくれていたのを、迅は忘れてはいなかった。

「いや、本当に久しぶりだな。どうだ。今からでは遅いし、また今度、休日に食事でも」

「いいですね。ぜひご一緒させてください」

「それじゃ……日曜の昼、この先のファミレスでどうかね？」

「解りました。宜しくお願いします」

「じゃあ、そういうことで」

手を上げて、人のいい笑顔を浮かべて去っていく井出に、迅もまた手を上げて笑顔で見送る。

その時――――――ふと、迅の目が彼の鞄に留まった。

正確には、鞄から少しはみ出していた、濃い茶という色合いながら眩い程の光沢を放つ？何か？に。

迅は首を傾げながら、端だけが見え、正体を推察することが叶わぬそれについて訝しげに顔を歪めるも、やがて何事もなかったかのように家路についた。

迅は知らない。

それこそが、彼を襲う悲劇の源であるということを。

そして少なくともそこで、その物体について彼に訊ねてさえいれば、悲しき運命だけは、回避することが出来たかもしれなかったのである。

☆★☆★☆★☆

「さて、と……」

家に帰り、家族と談笑しながら夕食を済ませると、迅は早速パソコンの電源を入れた。

何だかんだで昼間に鈴奈から聞いた話が気になったというのもあって、昨夜は触れることすら抵抗があった電源スイッチを何の躊躇いもなく入れていく。

やがてＯＳが立ち上がり、デスクトップが表示され、そして――――。

「来た……！」

すぐに、マスカレイドと英語で書かれたウインドウが、自動で開いた。

相変わらず毒々しい背景に、Ｌｏｇ－ｉｎという文字。

さらに。

「あった。これか……」

その更に下へページを送ると、Ｒｕｌｅと書かれた下に、幾つかの項目が箇条書きにされていた。

迅は意を決し、それを１つ１つ読み上げていく。

？　マスカレイドとは、電脳世界に形作られた仮想空間において参加者同士が戦うサバイバルゲームである。
？　マスカレイドの参加者には、予めマスクが贈られる。現実世界からマスカレイドに入るためにはマスクが必要であり、マスクがない者は立ち入ることは許されない。故に、参加資格はマスクそのものとなる。同様に、マスカレイドから出るためにもマスクが必要であり、仮想空間内で破壊されるなど何らかの手段でマスクを失ったプレイヤーは、仮想空間から出ることは出来ない。
？　マスクにはそれぞれ、パーソナルアビリティ、固有装備が1プレイヤーにつき1つ与えられる。双方共に様々な種類があり、特にアビリティは戦闘における使用回数が増えるにつれ進化する場合がある。
？　戦いにおいて特に制限はない。プレイヤー自身の死が直接、プレイヤーの敗北へとつながり、間接的、直接的手段を問わずその要因となったプレイヤーに戦績が加算される。得られる戦績の程度は、倒した敵のランクにより変動する。
？　褒賞は、一定期間ごとに積み立てたノルマとその余乗分に応じて与えられる。
？　敗北したプレイヤーは、現実世界からも仮想世界からも完全に消去（デリート）される。修復は不可能。

「本当に……死ぬのか」

どこかで、少女の言葉を信じたくない思いがあったのだが、実際にこうして文字として突きつけられると、どうしようもない思いに駆られる。

それと同時に、マスクには1ずつ、能力と武器が与えられるらしいことも解った。

鈴奈の刹那（タイム・ルーラー）の支配者と、あの宝石銃もこれにあたるのだろうか。自分に与えられた力は、どのようなものなのだろう。そんなことを考えながら、おそらくペナルティについて書かれているであろう次の欄へと進んだ。

？　戦績にはノルマがあり、一定期間このノルマに届かなかったプレイヤーには、ペナルティが加算される。

？　ペナルティ執行には猶予期間が与えられ、その間にノルマを上げることで回避することが出来る（但し、この際に得た戦績による褒賞は無し）。

？　その他、仮想空間にランダムに出現する魔物、ランブルを倒すことでも戦績を得ることが出来る。ランブル討伐によって得られる戦績もランブルのランクにより異なるが、他プレイヤーの場合より低い。

？　ランブルによる死も敗北とみなされる。その場合、褒賞は誰にも与えられることはない。

合計１０個の項目を読み終わり、迅は黙って画面を見つめた。

もはや、何も言うことは出来なかった。

戦わない場合のペナルティがあるというのは、どうやら本当のようだ。

一定期間と記されているだけなので、実際にどれほど戦わないでいるとペナルティになるのか解らないこと、そして実際に執行されるペナルティの内容が明かされていないことが、余計に恐怖を煽っていた。

だが、こうしてみるとたとえ得られる戦績が少なくとも、ランブルを狩っているだけで全てが解決する、というわけでもないようだ。ランブルを狩るにしろ、プレイヤーを狙うにしろ、一定期間内のノルマというものを果たさなければ、戦績不十分とみなされペナルティ猶予期間に入る。

本当に、よく出来たシステムだった。少なくとも、人々に戦いを強制させる――――その1点に対してだけは。

「くそ……」

ペナルティは存在する。そして、それを回避するには戦うしかない。

だが、迅はまだ怖い。

当然だ。つい一昨日まで、彼は死とはほぼ無縁の生活を送っていたのだから。

無論、実質的に死の可能性が皆無であったというわけではない。

急病で死ぬかもしれない。道行く人が、刃物を突き立ててくるかもしれない。不慮の事故に遭うかもしれない――――。

目に見えないだけで、日常の中にもそういった?死への可能性?が溢れているのは事実だ。

しかし、マスカレイドの死は目に見える。
銃で、刃物で――――様々な方法で人が、魔物が、常に虎視眈々と人の命を狙っているのが見える。
しかも、その中に自ら飛び込んで行かざるを得ない苦悩というのは、並大抵ではないものがあった。
「どうしろって言うんだよ、ったく……」
自分はおそらく、まだマスカレイドとやらに参加したての、云わばルーキーのようなものだから、このペナルティがすぐに施行されるというのはないかもしれない。
しかし――――。
「絶対、安全……なんて、言えねえか」
飛び起き、鞄から出してあったマスクを見つめる。
真紅の光沢は、昨夜の――――少年にしてみれば、十分に激闘と呼ぶに値する戦いを前にしても、未だ傷1つない。
それだけが、今は自分を勇気づけてくれるような矛盾した思いに至って、迅は疲れたように苦笑した。
そして。
「……行ってきます」

一言、誰もいないであろうドアの向こうへそう告げながら、迅はゆっくりとパソコン画面へとマスクを翳した。

☆★☆★☆★☆

「これは……」

意識が戻ると、迅は家の外へ出た。

相変わらず、人の気配のしない街は見慣れている癖にどこか落ち着かなかったが、それを気にしている余裕は、ドアを開けてすぐに目に飛び込んできた異形によってあっさりと霧散した。

ぎょろりとした1つ目をした、鬼のような醜悪な姿をした魔人。名付けるなら、サイクロプスとでも呼ぶべきだろうか。

茶褐色の肌をした筋肉質の身体で、のっしのっしとコンクリートを踏みしめていた異形は、ドアの開く音に一斉にこちらを見た。

それにびくりと身体を震わせながら、迅は祈るようにマスクを装着

した。

光に包まれた迅は、マスクによってあのタキシードへと姿を変える。

「行くぞ！」

この姿になってからの力に関しては、迅もよく解っているつもりだ。

故に、叩き込まれる前にまずこちらから打って出る。

先手必勝の理は、迅もよく理解していた。

だからこそ――――――攻める。

今にも腹の底から湧き上がってきそうな恐怖を、大丈夫だ、やれると自己暗示を繰り返して必死に抑え込み、こちらを見たまま未だ動かない隙に、迅は一気にサイクロプスの懐に潜り込み、拳を振るった。

「グガアアァァッ！？」

やはり、マスクを付けて強化された状態の拳はかなりの重さを誇っているようで、腹に減り込んだ拳にサイクロプスは悲鳴を上げて悶絶する。

更に数発、連続して拳の連打を叩き込んだ。

その1発1発が確実にサイクロプスの身体にめり込み――――――やがて耐え切れなくなったサイクロプスは、断末魔の叫びを上げて粒子と化し、消え去った。

すると周囲にいた個体が、仲間がやられた事実に怒り狂うかのように次々と襲いかかってくる。

だが――――――。

（この程度なら……！）

動きが見える。

しかもそれだけではなく、彼らの動きに反応するだけの身体能力が今の迅にはあり、故に彼らの拳を、爪を回避することなど造作もない。

おそらく、ランクの低いランブルなのだろう。

それは、初心者である迅にも戦いながら理解出来たが、それでもこのような異形の存在相手に立ち回りを演じている自分が酷く非現実的な存在に思えて、全てを倒し終えた後、迅は静かにその場に佇んだ。

目付きが悪い所為か、昔から迅はよく不良に目を付けられた。

本人には一切その気はないのだが、ガンを飛ばしているだの何だのと因縁をつけられては、喧嘩に発展することも少なくはなかった。

当然、そこで手を出しては問題となってしまうため、自分から手を出すことを迅はしなかった。その代わり彼らの攻撃を躱す身のこなしは、そんなことを続けている内にいつしか養われていき、それが現在こうしてランブルとの戦いに役立っていることなど、迅自身すら知る由もない。

ややあって、全く微動だにしなかった顔を漸く下へ向け、何もない

コンクリートの地面を一瞥すると、迅は溜まっていた恐怖を吐き出し、張り詰めていた空気を解きほぐすように深く溜め息をついた。

「これで、少しは足しになったか……？」

たったこれだけでノルマに達するとは考えにくいが、それでもその礎となるであろうことは間違いない。

こうして1日に短時間で構わないからログインして、少しずつ戦績を積み上げていく。

それが、最もリスクの少なく、最も確実な方法に思えた。

ともかくこれで、初日としての狩りは上々の結果に終わったと言えよう。

そう考え、元来た家へ戻るべく踵を返そうとする。

サイクロプス達との戦いでいつの間にか家から離れてしまっていたが、幸いここはまだ近所だ。

すぐに戻れば済む話。しかし――――――そう考えていた迅の思考は、次の瞬間、突如遮られる。

「っ！？」

「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

不意に響いた叫びに、咄嗟に身構えた。
殴りかかってきた何者かの拳を、迅は咄嗟に腕を交差させて防ぐ。
「ぐ、ぅっ……！？」
先程のサイクロプスの中に、生き残りがいたか――――――そう一瞬考えたが、迅はその考えをすぐに棄却した。
サイクロプスが粒子となって消滅したことは、先程この目で見た事実であるし、撃ち漏らしがあったようには見えなかった。
そして、何より――――――目の前で今拳を構えているのは、ランブルとは本質を違えるもの。
まるで執事のような装束を身に纏う？ヒト？は、青年というより壮年の熟練の空気を放っている。
顔には、自分が今まさに着けているものに似た造形のブラウンの色をしたマスクがついていた。
「まさか……他のプレイヤー……！？」
こんなに早く現れるなんて、と愕然とした想いを抱き、迅は呟きを漏らす。
まだ自分は、参加者としてはど素人。
ルールにあった固有武器も、能力すらよく解っていない状況。

そんな中で、どんな能力を秘めているかも知れない他プレイヤーを相手にするようなことは、自殺行為に等しかった。

（どうする……！？）

咄嗟のことに焦りを隠しきれぬまま、迅は必死に思考を巡らせようとする。

だが、そんな暇すら敵は与えようとはしてくれなかった。

「あああああぁぁぁぁっ！」

「ちぃっ！？」

再び絶叫を上げながら、ブラウンマスクのプレイヤーは一直線に迅へと迫る。

迅は舌打ちし、彼の拳を寸前で回避する。

そして、その後、即座に飛んでくる裏拳。

不意打ちの正拳突きより力がこもっていなかったためか、片腕のガードで難なく防ぐ。しかしそれでもランブルとは格の違うプレイヤーの一撃は、びりびりと痺れを腕へ伝えてきた。

「おいアンタ！　本気で人を殺そうなんて思ってるのかよ！」

「……すまないっ」

一瞬言葉に詰まったブラウンマスクのプレイヤーは、謝罪の言葉を述べながら再び拳を突き出す。

それに対処しながら、迅は何となく感じていた。

この人は、戦いに苦しんでいると――――――。

「……ああ、くそっ！」

初戦から、随分とやりづらい相手に出くわしてしまったものだ。

殺したくないのに、戦っている。おそらくはペナルティを控えているプレイヤーなのだろう。それも、他プレイヤーを狙わない限り到底挽回できぬほど、戦績が滞っているに違いない。

だが、だからといってこのままでは自分が危ない。

今はなんとか、持ち前の喧嘩の勘や反射神経でなんとか乗り切れてはいるが、おそらく彼の方が戦ってきた年月は長いのだろう。彼の拳からは、それがありありと感じ取れる。

このままでは、いずれにせよやられるのは自分だ。

やりきれない想いを抱きながら、なんとか退けようと拳を握り締めたところで――――――。

ズキュンッ！

「くっ！？」

「おわっ！？」

2人の間を、青白い光を纏った鉛玉が通り過ぎる。

ブラウンマスクのプレイヤーと共に銃弾が飛来した方向を見やると、紫の色をした仮面を着け、黒い上下とロングコートに身を包んだ鈴奈が、煙の上がる宝石銃の銃口をこちらへ向けていた。

「くぅっ……」

「あ！　おい、待てよっ！」

彼女の登場に、怯えたような呻きを上げて去っていく男を迅は呼び止めようとしたが、男はそのまま家の屋根伝いに跳び去っていってしまった。

「……迂闊だったわね」

「ああ。まさか早々にプレイヤーに当たるなんて……」

鈴奈の言葉に、迅はあのプレイヤーが去っていった方を見やりながら同意する。

が、彼女はそんな迅に溜め息をついて、首を横に振った。

「いいえ、そうではなくて。こんなに初期ポイントから離れたことよ。この距離では、他プレイヤーに出くわしても逃げ込めない。……忠告しておくわ。戦いに慣れるまでは、初期ポイントからなるべく離れないようになさい」

「……あー、そうかよ」

迅は返事をしながら、鬱陶しげに彼女から視線を逸らした。

やはり、この女はあまり好きになれそうにない。そう、心の内で毒づきながら。

「……で？　そういうお前はどうしてここに？」

「貴方と同じ、ランブル狩りよ。最近はどういうわけか、大量に出現するようだから。その調査も兼ねてね」

彼女に会った不幸を嘆くかのように、わざとらしく嫌味たらしい口調で問う迅の言葉にもどこ吹く風で、鈴奈は涼しい顔をしながらそう応える。

初心者の迅には解らなかったが、彼女に拠れば今出現しているランブルは平時に比べかなり多いようだ。

となれば、先程のサイクロプスが家の前に屯していたのも、通常からすれば異常と言えるのかもしれない。

それを話すと、鈴奈は顎に手を当てて何やら思案しだした。

「ランブルがそんなに集まって……でも、あの陣の形跡を踏まえれば……もしかしたら……」

「お、おい？」

自分を置いて思考の海に沈もうとしていた鈴奈に声をかけると、彼女も漸く我に返った。

ホルスターに収めていた宝石銃に右手をかけながら、迅に向き直る。

「ごめんなさい。少し考え事をしていたわ」

「ん、まあいいけどよ。じゃあ、俺はこれで帰るから」

「待って」

「……まだ何かあるのかよ……」

呼び止める鈴奈に、迅は不機嫌を隠そうともせずに表情に出しながら振り返る。

迅としては、調子の狂うこの女と少しでも長く一緒にはいたくなかった。

だからこそ、急にでも何でも話を切り上げて、帰ろうとしたというのに――――――あろうことか、彼女の方から彼を呼び止めてきたのだ。

しかしこれも彼の性か、彼女の呼び止めを振り払うようなことはせず、面倒ながらもそれに応じる。

そんな迅の心境を知ってか知らずか、鈴奈は表情を変えぬまま迅の背後を指さした。

「貴方、あの中を1人で家まで帰るつもり？」

「……え？」

彼女の言葉に、迅は背後をおそるおそる振り返った。

そこに広がっていたのは――――――。

「……すみません、手伝ってください」

「よろしい」

これ以上ないまでに町中に巣食った、異形達の姿だった。

項垂れつつそう鈴奈へ頼み込みながら、迅もまた拳を握りしめる。

突撃する間際、迅の脳裏を過っていたのは――――――先程の正体も知れぬプレイヤーの姿と、恐怖に震える声だった――――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9201w/

Log-in ?War?ld

2011年11月4日16時19分発行